

研究発表大会顛末記

第29回国際P2M学会春季研究発表大会結果報告

実行委員長 関研一

副実行委員長 小笠原秀人（文責）

1. はじめに

国際P2M学会では、毎年、春と秋の年2回、研究発表大会を開催しています。今回は、4月25日(土)に千葉工業大学（千葉県習志野市）で開催予定でしたが、新型コロナウイルスの感染拡大状況を踏まえ大会開催は中止となりました。一方、大会予稿集は、大会開催の有無にかかわらず、学会の継続性を鑑み当初の予定どおり投稿を受け、予稿集電子版として4月下旬に発行致しました。

大会の「開催」自体は中止となりましたが、第29回大会としては成立したことをご報告いたします。このような非常事態の中、迅速に開催中止の判断をするとともに、予稿集電子版の発行に尽力してくださいました春季主催者各位、学会関係者、一般参加者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

通常、大会顛末記には、大会当日の様子が写真付きで報告されますが、残念ながら今回はそのような報告を書くことができません。そこで、このような非常事態の中、運営側としてどのようなことを考え、どのような検討をしてきたのかを記録として残しておこうと思います。また、投稿された論文の傾向や内容についても紹介します。

2. 大会開催中止決定までの経緯

本大会は2020年4月25日(土)に開催される予定でした。例年どおり前年の年末（2019年12月20日）には大会開催のお知らせを発行しました。大会のテ

ーマは、「デジタル・トランスフォーメーション（DX）を加速するP2M」としました。

12月～1月の間は、新型コロナウイルスは日本には関係のない話という雰囲気があり、4月の大会開催には大きな支障になるとは思っていませんでした。しかし2月に入り、横浜港に到着していたクルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス号」から感染者が確認され始めた頃から雲行きが怪しくなってきました。

2月上旬の2月6日には、千葉工業大学で「国際P2M学会 ビギナーズ・セミナー」を開催しました。東京から離れ、夜間の開催にもかかわらず約20名が参加し、活発な意見交換が交わされました。ビギナーズ・セミナー開催前に、パネルのモデレーターとパネラーが集まり、パネル討論に関する内容や進め方について議論をしました。この頃までは、大会開催が中止になるとは想像していませんでした。

2月中旬の2月14日に、「R&Dプロジェクトマネジメント・シンポジウム」が満員の参加者のもと千葉工業大学 東京スカイツリーキャンパス（ソラマチ8階）で開催されました。この時期から、新型コロナウイルスの影響でさまざまな催しが中止あるいは延期となってきました。しかし、本大会の開催日の4月25日までには多少の余裕があることと、世界的にはある程度ピークを迎えようとしているという見立てもあり、開催中止あるいは延期ということに現実味はなかったように思います。そのため、しばらくの間は静観し、国内で大流行などの兆候が見え

てこない限りは、予定通り予稿〆切は3月中旬として進め、3月下旬の理事評議員会で確認していただく、という計画をたてていました。

しかしこの頃から新型コロナウイルスの感染が世界的に広がりを見せ始めてきました。そこで、2月下旬の2月27日に本大会の開催について、「今後の状況を見極めたうえで予定通り大会を開催するか、あるいは中止するか、3月24日に決定することになりました」というお知らせを会員向けおよび学会ホームページに発信しました。このような内容を発信するためには、開催中止となった場合の代替案の策定などが必須です。2月25日午後から26日午前間に、50件以上ものメールのやり取りを行い、運営側での合意形成を図りました。

その後、新型コロナウイルスの感染拡大に歯止めがかからず、上記のお知らせの発信から約1ヶ月後の3月25日に投稿者への方々へ中止のお知らせを発信しました。その後、3月27日に「第29回 国際P2M学会 春季研究発表大会 開催中止と予稿集発行等に関するお知らせ」を会員向けに発信し、学会ホームページに掲載しました。

このような一連の判断と発信をしてきましたが、この判断の基準としたものは、大会の「開催」中止はやむを得ないが、第29回大会としては成立させるということでした。これは、学会としての継続性を維持するとともに、学位や資格実績取得を目指している投稿者への事を考えた結果定めた基準です。また、ステークホルダーを含めた議論と迅速な判断を下すためには、入念な準備とリーダーシップが必要となります。その中心となったのが、大会企画委員長の久保裕史氏（国際P2M学会副会長、公益社団法人 JAPAN of ASIA 代表理

事、当時は千葉工業大学教授）でした。短期間で議論を重ね重要な判断を下し、大きな混乱もなく大会を成立できたことは、大会企画委員長・副委員長、大会実行委員長・副委員長、開催校事務局という大会開催のための体制がうまく機能し、各担当がそれぞれの持ち場で着実に任務を遂行した結果であるということをお知らせしてお伝えしておきます。

3. 研究発表大会の概要

ここでは、当初予定していた研究発表大会の概要を紹介します。

■大会テーマ

デジタル・トランスフォーメーション (DX) を加速するP2M

■開催日時・開催場所

- ・開催日時：2020年4月25日（土）
- ・開催場所：千葉工業大学
津田沼キャンパス

■趣旨

企業活動においては、新しいデジタル技術によって既存のビジネスから脱却し、新たな価値を生み出すためのデジタル・トランスフォーメーション (DX) の取り組みが加速しています。昨今は、不確実性の増大が経済の見通しを困難にし、また、気候変動を初めとした様々な変化が世界規模で起こっています。国内では、あらゆる人が質の高いサービスを受けられる社会を目指し、日本が世界に先駆けて実現すべき将来像として Society5.0 のビジョンが掲げられています。このように、人々の生活を様々な視点で良い方向に変化させるための根本的な変革が多方面で模索されており、都市のこれからのあり方なども今後変化していくことでしょう。

DX実現の3本柱としては、ビジネスモデル、業務プロセス、顧客体験が挙げられています。これは、DXを加速するうえで、企業の経営活動のみならず、労働環境の変化や、市民の社会活動、公共分野も含めた、幅広い変革のアクションが重要になることを意味しています。すなわち、DXによるパラダイムシフトの実現には、企業の在り方や人々の生活を変化させるための複数・異種のプロジェクトを並行して行うプログラムマネジメントが必須であり、P2Mの役割と期待は益々大きくなっていくものと思われます。

以上の観点から、本大会ではDXとP2Mの関連性について様々な視点から議論し、今後、国際P2M学会が果たすべき役割と方向を明らかにする場にしたしたいと思います。

■大会スケジュール

- ・午前：研究発表
- ・午後：基調講演
パネルディスカッション
懇親会

■基調講演

- ・基調講演 1
「令和における新しい社会設計手法」
講師：吉田邦夫氏（国際P2M学会名誉会長、東京大学名誉教授）
- ・基調講演 2
「デジタルトランスフォーメーション推進の国内外動向と政策展開」
講師：和泉憲明氏（経済産業省 商務情報 政策局 情報産業課企画官）

・基調講演 3

「未来都市の創発とアーバンディジタルトランスフォーメーション」

講師：西山敏樹氏（東京都市大学都市生活学部准教授、同総合研究所未来都市研究機構生活研究ユニット長）

■パネルディスカッション

- ・テーマ：「DXにおけるP2Mとは」
- ・モデレーター：
小笠原秀人氏
（千葉工業大学社会システム科学部教授）
- ・パネリスト（順不同）：
和泉憲明氏
上條英樹氏（TDCソフト(株)執行役員）
中谷多哉子氏（放送大学情報コース教授）
西山敏樹氏

4. 投稿された論文の概要

開催予定であった4月25日に、「国際P2M学会2020年春季研究発表大会予稿集」を配信した。投稿された論文は21件であり、それぞれの論文は「DX」、「IT」、「社会系」、「人材教育」の4つに分類されている。

「DX」に関連する論文は5件である。これらの論文は、経営変革、デジタル変革を加速するためのリーダーシップのあり方や組織的な取り組みに関する内容と、小企業向けIT経営やDX推進に関する内容であった。DXに関する“考え方を整理する”、“悩みを解決する”ためのヒントとして活用していただきたい。

「IT」に関連する論文は3件である。これらの論文はインターネットの利用環境の向上、利用端末の多様化・高機能化によって様々なサービスが広がってきて

いる状況の中、サービスをいかにマネジメントすればよいか、システム（ハードウェアを含む）のアップグレードによってコミュニティにどのような影響を及ぼしてきたかという内容であった。インターネットを活用したサービスのマネジメントを研究・検討する際の参考にさせていただきたい。

「社会系」に関連する論文は7件である。社会という幅広い分類であるだけに、論文のテーマは多岐に渡っているが、その根底にあるものは、いかにSDGs（持続可能な世界を実現するために国際社会が目指す17のゴールが示されたもの）に取り組めばよいかという内容である。社会課題を解決するためのマネジメント方法、未来都市におけるプロファイリングマネジメントの分析方法、復興における多世代共創プロジェクトマネジメントのあり方、地域政策への関心層との連携方法、民間環境助成金における採択手法、創造的統合マネジメントにおけるビジネスモデリング&シミュレーション技法の活用方法、組織開発を促進するための診断手法などを知る事で、社会や企業における課題を解決するための活動や研究に役立てていただきたい。

「人材教育」に関連する論文は6件である。地方創生人材の育成方法、ファシリテーターによる「場のデザイン」スキルの向上、フィールドサーベイを活用した価値創造に必要な価値とスキルの訓練方法、学生のセキュリティ意識向上のための方法、プロジェクトにおけるコミュニケーション能力を向上させる方法、協動的メンバ編成を促進するための手法など、具体的に活用する場面を想定した内容となっている。どのような人材を育成したいのか、どのような能力を高めたいのか、といっ

た課題を持っている方々の参考としていただきたい。

5. 会員へのメッセージ

2020年3月27日に発信された「第29回国際P2M学会 春季研究発表大会開催中止と予稿集発行等に関するお知らせ」に含まれている、吉田邦夫名誉会長、山本秀男会長、理事会一同からのメッセージを最後に再度お伝えし、研究発表大会顛末記を終わりとします。

会員の皆様へ

新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、春の大会を中止せざるを得ませんでした。P2M学会は、化学工学者が中心となって創立されましたが、以来、IT、建設、エンジニアリング産業、化学・食品産業など多くの産業分野の経営や技術開発に携わる人々、そして大学の教育や研究に携わる人々が加わって、P2M理論を活用して、微力ながらも、イノベーションに資することを目指して活動してきました。今度のCOVID-19が引き起こした世界的な騒乱は、私達が、VUCAの時代と言われるように如何に不確実で複雑で変動の激しい世界に生きているかを思い知らせるところとなっています。しかし、これは私達が、新たなP2Mを生みだし、今後の指針を示すべきと鼓舞されていると考えるべきだと思います。

会員の皆様、中止を単なるお休みとせず、休憩時間の有効活用を考えよう、と呼びかけます。

名誉会長、会長

理事会一同

2020年7月31日受理